

## 養護教諭のスキルラダーを活用した研修プログラムの開発

高橋佐和子<sup>\*,1)</sup>、中村富美子<sup>2)</sup>、黒田恵美<sup>3)</sup>

倉光加奈<sup>4)</sup>、中泉亜子<sup>5)</sup>、松山実樹<sup>6)</sup>、荒木田美香子<sup>7)</sup>

<sup>1)</sup>聖隷クリストファー大学、<sup>2)</sup>沼津市立大岡小学校、<sup>3)</sup>浜松市立八幡中学校

<sup>4)</sup>沼津市立西浦小学校、<sup>5)</sup>田原市立野田小学校、<sup>6)</sup>河津町立東小学校、<sup>7)</sup>国際医療福祉大学

【目的】養護教諭の能力の自己評価と目標設定の指標とするため、11 業務別・4 段階（「S1：新人レベル」から「S4：熟練レベル」）からなる、スキルラダーの開発を行ってきた。養護教諭は各職場にほぼ 1 人しか配置されない職種であり、身近にロールモデルを持たないという研修上の問題がある。自己の課題やスキルアップ方策の明確化につながるスキルラダーは、養護教諭の能力向上に不可欠なツールであり、養護教諭の現職教育としての活用を目指している。研修はスキルラダーの 11 業務別に開発する必要があるが、本研究ではこのうち最も研修ニーズの高い「救急処置」を取り上げ、研修プログラムの実施及び評価を行い、プログラム開発への示唆を得ることを目的とする。

【方法】研修会の開催を雑誌及びホームページ上で広報し、参加申し込みのあった 17 名を対象とした。研修会の内容は、午前がスキルラダーの説明と救急処置のスキルラダーによる意見交換、午後がフィジカルアセスメント演習であった。参加者のスキルの変化を評価するために、研修前・午前終了後・午後終了後に「保健室で対応可能な基本的救急処置ができる」など 41 項目の救急処置スキルラダーチェック（「○：できる」または「×：できない」）を行った。動機付けや意欲の評価には、午後終了後のみ「本日学んだことは職務の役に立つ」など 5 項目を 4 段階（「4：かなり思う」から「1：思わない」）で調査した。聖隷クリストファー大学倫理委員会の承認を得た方法を遵守した（認証番号 16008 号）。

【結果】スキルラダーの回答が変化したのは 17 名中 15 名であり、事前の結果と比較して、午前終了後×から○になったのは 11 名、○から×になったのは 4 名であった。午前終了後○になった 59 項目は重複を除くと 25 項目であり、S1 が 10 項目、S2 が 11 項目、S3 が 3 項目、S4 が 1 項目だった。○への変化が 4 名と最も多かった項目は S1「来室者の対応記録を主観的・客観的情報の両面から取ることができる」と S3「事故・疾病の再発防止に関し保護者の気づきを促す」であった。事前の結果と比較して、午後終了後×から○になったのは 8 名、○から×になったのは 3 名であった。午後終了後○になった 9 項目に重複はなく、S1 が 2 項目、S2 が 6 項目、S4 が 1 項目であった。動機づけや意欲への回答は、全項目で全員が「4：かなり思う」、「3：少し思う」と答えた。平均点の高かった項目は「学んだことは職務の役に立つ」、「新たに学んだ知識やスキルがあった」だった（3.82）。

【考察】午前終了後○への変化が多かったのは、スキルラダーの説明により項目の示す実践が理解できたことや、ディスカッションで他の養護教諭の実践を聞き、自分にもできそうだと感じたことが影響していると思われる。午後のフィジカルアセスメント演習終了後に新たに回答が変化した項目は、午前終了後に比べて少なく、評価項目が、午後の演習とあっていなかったと考えられた。午前、午後ともに○から×へ変化した項目は、項目の示す実践を語り合い、学習する中で意味をより深く捉えられるようになった結果であると考えられる。また、動機付けや意欲の評価は高く、本研修会は一定の効果があったと考えられる。

【結論】ディスカッションでのスキルラダーの活用により、実践が具体的に語られ、スキルアップにつながる可能性がある。スキルラダーのレベルに応じた研修開発のためにスキルの向上に寄与する研修内容を明確にする必要がある。

【発表学会の状況】第 63 回学校保健学会（2016, つくば）、第 5 回公衆衛生看護学会（2017, 仙台）、The 3<sup>th</sup> KOREA-JAPAN joint conference on community health nursing（2016, Seoula）